

奈良時代、ことに天平時代の平城京の周辺には、いわゆる南都七大寺をはじめとして多くの寺々（これを官大寺という）が所在し、そこには多くの僧尼（これを官度僧・官僧という）が所属し、修行と法会を行う日々をすごしていた。時には、天皇・貴族層といった俗なる人々との信仰的・文化的、そして、政治的な交流と相剋の日々を送っていた。本書の題名となっている行基（六六八〜七四九）と道鏡（？〜七七二）は、その顕著な事例である。二人は、かたや高僧・名僧の代表格、かたや悪僧の代表格として、今日にいたるまで語り継がれている。

本書は、高僧・名僧（本書では、これを時には善僧と表記する）の典型とされている行基が、何故に善僧の代表格となつたのか。一方、悪僧の典型とされている道鏡にスポットライトを当て、何故に悪僧の代表格となつたのか。そして、二人の行実（本書では、行い、軌跡、生涯などと解釈した）を対照（比較検討、その背景を問う）することを主体として、解明の糸口を見いだすこととした。

行基をめぐる研究の多くが、当初から善僧であるとの前提にあつて論述されている。そして、行基の行実をもつて国家と仏教の関係を論ずることも多い。しかし、行基が善僧で道鏡が悪僧であるとする所以は、問われることがなかつたように思う。このことにも思いをめぐらせると如何というのが本書の目論見である。

本書のもう一つの目論見は、奈良時代の政治や社会を語るには、律令制度のもとにあつた藤原氏をはじめとする天

皇や官僚の動向をもつてするだけではなく、文化、宗教の根幹を担った奈良仏教に息づいた僧尼の動向にも注意すべきであると喚起しなかった。政治史的な視点のみならず文化史的・宗教史的な視点や見地からのアプローチも重要であるということである。そのために、本書では、良弁と『日本靈異記』（以下、『靈異記』と表記する）の編者景戒と吉備真備の三人にも、本書の随所に登場願ひ、あたかも水先案内人やナレーターとしての役割を担っていただいた。ことに、景戒の編纂した『靈異記』の記述を随所で紹介している。

良弁と吉備真備の二人は、後述するように、長寿をもつて奈良時代、ことに天平時代を生き抜き、眼前に展開していた行基と道鏡の行実を具に見続けていたという理由による。

いつものように叙述の繰り返しを行うことで、自らを納得させながらの構成となっているかもしれない。構成は、第一章では、本書の主役である行基と道鏡をとりまく僧俗の人々を紹介した。これにより、奈良時代の僧尼（特に官僧）を取り巻く宗教史的な環境について述べた。第二章・第三章では、『天平期の僧侶と天皇』、『行基伝承を歩く』、『天平期の僧と仏』などの拙著を手がかりとして、行基と道鏡の行実を紹介した。

第四章では、同時代の天皇や貴族層（官僚）との関わりを交えて、善僧と悪僧、師弟関係、天皇や官僚との関係などのテーマを設けて、行基と道鏡の行実を対照する手がかりとした。そして、善なる僧と悪なる僧の見直しを試み、本書の結論的な内容とした。あわせて行基と道鏡の行実を対照する作業を通じて、奈良仏教から平安仏教への移行についても試論した。

二人の僧の行実を対照する作業は煩雑であり、ともすると記述内容に大幅な重複があるかと思う。いかなる課題と展望が開けるかを探っている筆者の悪戦苦闘の様と心からご海容頂きたい。あえて弁解するならば、高品質な漆器を複製するには、何回となく漆を塗り重ねるといふ。拙著が漆器と同質であるとはいえないが、記述の繰り返しの仕組

みに通ずるとご理解頂ければ幸いである。第四章は、第二章と第三章の記述をいくつかのテーマを設けて、行基と道鏡の行実を対照(対比・再検討)したものである。まさに塗り重ねである。これによつて、最善の作品となることを考えて行つたこととしてご理解頂きたい。

「おわりに」では、本書の内容をトレースして、奈良仏教を担つた僧尼へのパラダイム(通念や常識)を払拭することを宣言し総括を行つた。こうした構成であるので、最初に第一章と第四章と「おわりに」を、その後、『靈異記』の長文引用を主とする行基と道鏡の行実を整理した、第二章・第三章の順にご一読頂くのも可とさせていただきます。また、煩雑の印象を免れないが、史料については、可能な限り全文を引用した。関係史料を網羅し紹介するという目的で行つた。先行研究については、引用させて頂いた箇所末尾に、()内に人名と文献名を記入した。表記は最小限にとどめたので、詳細については、末尾の参考文献一覧をご覧ください。

なお、人名については、初出の箇所で()内に、生没年及び在位期間などを記入した。なかでも孝謙天皇と称徳天皇は同一人物であり、表記については、本書では、煩雑をさけるために天平勝宝元年(七四九)七月の即位から天平宝字八年(七四六)十月までは孝謙天皇、同年以降、重祚(再び即位すること)して神護景雲四年(宝亀元年と改元・七七〇)八月までは称徳天皇と表記した。